

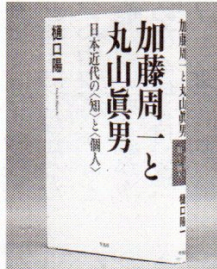
加藤周一と丸山眞男

平凡社
1944円

樋口 陽一 著

日本国家の「姿形」を探る

戦後七十年を経た今、本書は加藤周一と丸山眞男という二人の戦後を代表する知識人の仕事を読み返しながら、「私たちが作っているはずの日本の国家にどんな姿形をさせるのか」について探ったものである。憲法学の泰斗である著者がこ



のような大きなテーマについてあらためて論じるのは、憲法改正論議にみられるように、「戦前への逆戻り」を憂慮させる事態が、昨今の安倍政権の下で進みつつあるからに他ならない。

戦後七十年を経た今、本書は加藤周一と丸山眞男という二人の戦後を代表する知識人の仕事を読み返しながら、「私たちが作っているはずの日本の国家にどんな姿形をさせるのか」について探ったものである。憲法学の泰斗である著者がこ

例えば著者が丸山の思想から取り出すのは、丸山が学生時代に書いた論文での「弁証法的な全体主義」という概念である。これは国家と否定的に対立する個人の自由が、「国家を媒介にしてのみ具体的に存立する」ということを述べたものである。国家は個人の自由を確保する力を持ち、それを媒介にしてこそ、公共的な役割を積極的に引き受けることのできる「規範創造的自由」が可能になる。また、著者が加藤の「雑種

法政大学社会学部教授

佐藤 成基 評

文化」論のなかに見いだすのは、近代は伝統の上に成り立つものであり、またその伝統の「型」は決して固定されたものではなく、外来文化と融合しながら「持続しつつ変化する」ということへの着眼である。

こうして著者は「弁証法的」で「雑種」的な日本の国家（あるいは公共社会）の構想へと向かう。その具体的な「姿形」についての議論はここにはない。だが、そこで近代的な「個人」が不可欠な前提であることは強調されている。本書は加藤と丸山の再読を通じて、近代立憲主義に新たな国家像への可能性を開いた。しかしその実現のためには、幾多の難題が残されている。

ひぐち・よういち 1934年、仙台市生まれ。憲法学。東北大学、東京大学等で教授を歴任。国際憲法学会名誉会長。